

# 実践活動と連携したカリキュラムのあり方について

岡村 吉永・田中 理絵・沖林 洋平・南浦 涼介・源田 智子・岸本憲一良・鷹岡 亮

## Curriculum in Cooperation with Practical Activities

OKAMURA Yoshihisa, TANAKA Rie, OKIBAYASHI Yohei,

MINAMIURA Ryosuke, GENDA Tomoko, KISHIMOTO Kenichirou, TAKAOKA Ryo

(Received January 7, 2015)

キーワード：教員養成、実践活動、カリキュラム、小学校教育コース、コース指定科目

## はじめに

新たな学びや学力観についての理解が進む中、その実践としてのAL（アクティブラーニング）（文部科学省, 2014）も次第に普及しつつある。実践的かつ課題解決的に学ぶALの取り組みや成果、その課題については、今後多くの報告がなされてくるものと考えているが、本報では教員養成に関わる実践例として、山口大学教育学部小学校教育コース（小学校教育コース）のカリキュラムと授業の概要を紹介し、さらにその実践を基に今後のあり方についても考察する。

小学校教育コースは、平成21年度に新設され、平成24年度に第1期生を輩出した。今年度（2014）末卒業予定者（第3期生）を含めた総卒業生数は94名（学年定員30名）で、卒業時の教員就職者は79名（84%）、この内正規採用者は63名で教員就職者の80%となっている。教員志望者ならびに正規採用者の占める割合の高さは特筆されるものであり、この背景に学生が取り組む実践活動の豊富さと内容の充実があることは否定できない。内容の充実に関しては、コースカリキュラムを実践活動と結び付け、その意義や評価を繰り返し確認していることが良い循環を生んでいるといえよう。こうした成果あるいは評価の要因である小学校教育コースが有するカリキュラムの考え方や体系、各授業の内容を整理することは、小学校教育コースの今後を考えるうえで不可欠であり、この作業が教員養成に携わる他の組織にとっても一つの指針になれば幸いである。

## 1. カリキュラム構成の考え方と特色

小学校教育コースは、山口大学教育学部が培ってきた「ちゃぶ台方式による協働型教職研修」（以下ちゃぶ台方式、山口大学教育学部, 2007）をより積極的に教員養成に反映させ、その実効性を検証する先導的な試みとして設置された経緯を持つ。コース設計に関する当時の資料（企画委員会H19/12/05 以下、企画委資料）では、カリキュラムの構成の考え方として「中教審答申（H18/7/11）の主旨を反映し、「小学校教育に必要な『実践的指導力』、それを支える『基本的な知識・理論』、そして『現代的教育課題への対応力』を体系的に学べるように、3つの系からなる『コース指定科目』を1年次から4年次にかけて体系的に学ばせる」とし、教育方法の特色を「実践活動と省察活動を一体のものとして継続的に指導し、『ポートフォリオ』手法を導入し、段階的かつ着実に実践力の強化を図る」としている。学校教員に求められる実践的指導力を意識し、そのためにちゃぶ台方式で蓄積した理論と実践の往還に関わる手法を活用しようとするものといえよう。

### 1-1 既設の教科教育コースとの関係

教育学部では、小学校教育コースの設置以前から小学校教員の養成は行われており、新設にあたって既設

コースとの差別化が強く求められることになった。小学校教育コースのカリキュラムを理解するためには、こうした既設コースとの関係を明らかにしておく必要があり、以下に企画委資料から当該部を抜き出し紹介する。ここからは、小学校教員として、いわゆる教科のピークをつくらないこと、様々な学校課題に対処できる実践的指導力の養成が主眼におかれたことが理解されよう。

#### 【既設のコースとの関係】

- 既設の「教科教育コース」における小学校教員養成がいわゆる「ピーク制」のもとに「特定の強化に強い小学校教員」の養成を旨とするのに対し、このたび新設する「小学校教育コース」は小学校における多様な問題・課題に対して事例対処的に取り組むことのできる「ジェネラリスト」の養成を目指している。
- ここでは、「いじめ」「孤立」などの心理臨床的事象をはじめ、「保護者や地域との協働」「学校・学級経営」などの課題発見とその解決により高い実践力を備えた小学校教員の養成を目指している。  
(企画委資料H19. 12. 05)

## 2. 小学校教育コース コースカリキュラムの概要

前述したように、小学校教育コースのカリキュラムでは、3つの系からなるコース指定科目群を設定し、1年次から4年次にかけて体系的にこれを学ぶようにしている（岡村ほか, 2012）。教員は3つの系のいずれかに所属するが、授業は所属する系以外も担当する、あるいは複数の系の教員が協働して1つの授業を担当することも多く、全体が有機的な関連をもって運営されているのが特徴といえよう。以下では、各系の設定主旨とそこに属する主要な授業について概要を整理する。

### 2-1 子ども理解系

幼児期から義務教育期における子どもの成長や発達、心理特性や子どもを取り巻く教育環境の状況等について、観察、交流や指導演習等の体験的学習を通して具体的に理解させるとともに、事例に応じた適切な指導のあり方について学ばせる。

#### 2-1-1 子ども理解系の授業および概要

##### 子ども理解演習（1年後期・2単位）

###### 【目標】

- ・子どもの発達理論および現代の子どものおかれた状況に関する基礎的・専門的理論を習得する必要性を自覚させる。
- ・また、子ども理解のための方法（観察法、調査法、記録法、面接法）を習得する。
- ・そのうえで、大学での学びにおいても、主体的・計画的・目的意識的に取り組む意欲や心構えを養う。

###### 【主な内容】

- ① 子どもの発達・特性に関する基礎論を学んだ後、実際に子どもと接することを通して、子どもと向き合う際に教員として必要となる態度・知識の必要性を自覚させる。
- ② 演習を通して、子ども理解のための方法を習得する。
- ③ 体験活動を通して得られた知見を、大学で学ぶ理論と有機的に関連させる方法を学ぶ。

###### 【実践力向上のための取り組み・課題】

- ・協働実践基礎の学習を基礎として、実践的に子どもの発達特性に関する理解を深める。
- ・PDCAサイクルの理解とこれを意識した学習活動を展開するよう意識づける。
- ・地域や家庭における子どもの生活実態やこれを支える仕組み等について、学校以外の関係者から話を聞く機会を設け、多様な観点から子どもを理解できるようにする。具体的には、コース指定科目「学習コミュニケーション演習」と合同で関係者等を招いたフォーラムを実施する。

##### 子どもカウンセリング論（2年前期・2単位）

###### 【目標】

- ・子どもの発達理論について学び、現代の子どもを取り巻く課題について理解するとともに、教員に

求められる声かけの方法とその効果などについて学ぶ。

- ・子どもの発達支援に関わる諸機関（学校、児童相談所、法機関、病院等）の有機的連結のあり方について知る。

#### [主な内容]

- ① 児童期を中心とした、幼児期から青年期までの基礎的子ども発達理解とカウンセリング
- ② 子どもを取り巻く現代的課題に関する理解（論文講読を中心とした演習）
- ③ 心理教育的援助として教員が身につける心理教育的カウンセリングの基礎
- ④ 子どもの発達支援に関わる諸機関の有機的連結のための方法を、実践例および理論をもとに演習で学ぶ。

#### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・子どもや学校を取り巻く諸課題を知り、そこで起きている様々な問題等について事例などをもとに理解を深める。
- ・子どもの発達段階やおかれた状況などを考慮した適切なカウンセリングやコーチングのあり方について学ぶ。
- ・教員が一人で問題を抱え込まないための学校における支援態勢や、地域における諸機関等の連携について理解を深める。
- ・ロールプレイなどを用いて、学習の効果を高める工夫を行う。
- ・学校心理学の知見(石隈・水野, 2009)に基づく、心理教育的援助サービスの理論と実践について理解を深める。文献情報:石隈利紀(監修)水野治久(編)(2009)、学校での効果的な援助をめざして、ナカニシヤ出版

### 学校課題理解演習（3年後期・2単位）

#### [目標]

- ・教師になるにあたって、関わりを持たざるを得ない社会の中で度々議論される「学校課題」「教育問題」を捉え、今後の実践的活動を省察する際の基本的パースペクティブを養う。
- ・特に、「対策のつくりかた」については、認知主義的な思想による子どもの個への対応の観点のみならず、広く社会文化的に状況をつくり変えていくような対応の発想と具体的方法を学ぶ。

#### [主な内容]

- ① 「学校課題」「教育問題」を、「事実の捉えかた」「原因の探り方」「対策のつくりかた」の3観点から捉え、その具体的考察ができる。
- ② ①の観点から、いじめ問題、教員の質的向上問題、学力問題、子どもをめぐる家庭との関連の問題などを見通す目を持つ。
- ③ 対策については、地域連携、学校連携、あるいは校内や地域において、その状況をつくり変えていくような具体的仕掛けづくりの発想を学び、その視点から対策を考えることができる。

#### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・グループ討議や意見交換、発表形式の授業においては、人事交流教員との議論を混ぜ込みながら、実際的な発想、最新のな地域の取り組みの具体例と関連付けながら学ぶ。
- ・チューター活動や教育実習においてみてきた学校課題を、社会学的な視点から捉えなおすことを行い、「省察」を行うときの視点を持ち、それをもって現場を捉え直すようにする。
- ・学生によるグループ討議、発表や省察においては、学生の相互評価、振り返りや成果と課題の共有等を重視するとともに、小学校教育コースの上級学年の学生をTAやファシリテータとして参加させ指導の充実を図る。

### 学校教育実践演習（4年前期・2単位）

#### [目標]

- ・学校課題（学級経営・学級づくり、いじめ・不登校の克服、子どもとのコミュニケーション、教材研究・教材開発、軽度発達障害児への対応、等々）に即しつつ、学生がそれまでの理論的・実践（体験）的学習の積み重ねによって構築してきた個々の実践的学習課題を主体的に深化・発展させることを目標とする。

## [主な内容]

- ① 各学生が設定する学校課題等に対し、教員がそれぞれの専門に応じて実践的に指導を行う。

## [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・本演習は、同時期（4年前期・6月）に実施される応用（委託）実習の事前・事後指導に連動するものと位置づけることができる。
- ・1年次からの理論的学習や実践的学習（コースカリキュラムならびにカリキュラム外での活動、3年次の基本実習など）の中で、各自が得てきた経験や課題意識をもとに、学級指導に関する実践的テーマを設定し、調査・発表・討議を行う。
- ・さらに、授業での考察を実際に応用（委託実習）する中で、実践と省察の意味を確かめるとともに、個々の学生が持つ学習課題を具体的な経験に即して主体的に考察を深めるようにする。

## 2-2 学習指導系

現代の小学校教育や学習指導等にかかる諸課題をふまえ、「子どもとのコミュニケーション」、「グループ、人間関係づくり」、「教材開発と指導方法の工夫改善」、「個に応じた指導と評価の一体化」、「ICTの活用」等について、実場面での指導を前提に学習させ、教科や指導内容に関わる理論と実践の統合を図らせる。

### 2-2-1 学習指導系の授業および概要

#### 学習コミュニケーション演習（1年後期・2単位）

##### [目標]

- ・小学校教員として、子どもとのコミュニケーションを円滑に図り授業を価値あるものにするために、分析力や説明力などの能力を高め、学習指導技術を磨く必要がある。子ども理解、コミュニケーションのあり方、学習指導のあり方などの研究を深め、小学校教員として必要な資質、授業力を身につけることができるようにする。

##### [主な内容]

- ① コミュニケーションとは何か（意義、種類、方法）
- ② 子どもとのコミュニケーション（方法および留意点）
- ③ 学習指導におけるコミュニケーション（構造化）
- ④ 良好なコミュニケーションを阻むもの（ノイズ、色使い、発達障害ほか）

##### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・小学校教員に求められるコミュニケーション能力について、具体的な場面や対象者（保護者や同僚など、子ども以外）を想定し、実地にその能力を高めるよう工夫している。コース指定科目である「子ども理解演習」と合同で開催するフォーラムでは、PTA役員、子育てボランティア主催者、子ども会および地域活動関係者といった教員以外で子どもに関わる人々を講師とし、全体会や講師を囲んだグループ活動を行う。地域教育のあり方や課題、コミュニティ・スクールなどに対する考え方について、授業での学びを再確認する場であると同時に、コミュニケーションの取り方や会の運営などについての学びを深める場として位置づける。
- ・②については、子どもの発達段階等を考慮したコミュニケーションのあり方について実地に理解を深める。
- ・特に③については、教員の支持が具体的で学習者に正確に伝わることに重点をおき、発言や指示の構造化について理解を深める。
- ・②③に関わって、④コミュニケーションが上手くできない場合の原因ならびにその際の配慮について知る。

#### 学習メディア活用演習（2年後期・2単位）

##### [目標]

- ・教材研究、授業の準備段階、授業終了後の評価段階においてICTを活用するための能力を身につける。

- ・授業の中で、資料を説明したり、課題を提示する場面や児童生徒の知識定着や技能習熟を図る場面においてICTを活用するための能力を身につける。
- ・学習の主体である児童生徒がICTを活用して効果的に学習を進めることができるように、支援・指導できる能力を身につける。

#### [主な内容]

- ①「わかる授業」を実現するための手段として、学習メディアやICT機器の基本的な仕組みについて特徴を理解し、活用スキルを習得する
- ②小学校等におけるICT活用授業の参観
- ③子どもの発達段階を考慮した学習メディア教材の作成と模擬実践

#### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・ICT活用授業の実態（利点や問題点等）を理解するために、小学校等の協力を得て、ICT活用授業を参観する。
- ・学習メディア教材の模擬実践に関しては、受講者の興味・関心に応じて、小学校等で実践したり、小学生や親子を対象としたワークショップや勉強会の企画・実践を行う。

### 教材・指導法開発演習（3年前期・2単位）

#### [目標]

- ・教材を開発する際、単元の目標や指導上工夫することとを密接に関連させて考える必要がある。そのためには、子どもの実態を分析し、身につけさせたい力を明らかにしておくことが重要である。また、授業を通して教材を効果的に活用し、指導目標を達成するための学習指導技術を磨く必要もある。講義、演習を通してこれらの力を身につけ、教材開発、学習指導技術向上に対する意欲を持つことができるようにする。なお、教材開発においては、知的財産権に配慮した作成活動を行えるだけの知識や態度を身につける。
- ・教育実習を控えていることを考慮し、模擬授業を中心に指導案の作成や、実際の児童を想定した学習指導が行える実践的指導力を身につける。

#### [主な内容]

- ① 教材の意義
- ② 学習指導のあり方と指導技術
- ③ 学習指導案の作成
- ④ 模擬授業

#### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・学習指導における教材の意義ならびに選定に当たっての配慮について理解を深める。
- ・学習指導を効果的にするための環境や設備、教育機材、教具、副教材等について、実地に理解する。
- ・指導効果を高めるための教具や副教材づくりを行い、その効果について相互に検討する。
- ・学習指導要領や教科書を読み解き、適切な指導が行えるための演習を中心に展開する。
- ・課題として、学部が行う教科の指導法に関する授業との連携が不十分であることが挙げられる。教材や教具の開発を授業内で全てカバーすることは困難であり、連動する授業の開設が検討される必要がある。

## 2-3 協働実践系

学校、家庭、地域社会等子どもが育つ地域の社会的、教育的環境について、その機能、役割や相互の関係性等を具体的に理解させるとともに、小学校における総合的な学習の時間や特別活動等における指導の具体、地域と連携した小学校運営のあり方や体験学習のあり方等について学ぶ。

### 2-3-1 協働実践系の授業および概要

#### 協働実践基礎（1年前期・2単位）

#### [目標]

- ・地域の小学校等実際の教育現場をフィールドとし、学校教員や保護者等と協働型の実践を行うため

に求められる基礎的知識や態度を身につける。

- ・特に、対人関係向上に向けたコミュニケーション能力、人権尊重に関わる意識や感覚、子どもの情報等についての守秘事項や学校安全上の配慮事項等協働実践を行うに必要な知識、技能や態度等を身につける。
- ・実践活動の省察と共有のためのツールである「発見ノート」（霜川ほか, 2009）の使い方に慣れ、小学校教育コースで学ぶための基礎的態度、スキルを身につける。

#### [主な内容]

- ① 小学校等での協働実践に必要な知識、配慮事項等の理解
- ② 小学校等での協働実践に求められる技能、態度等の定着
- ③ 教員としてのキャリア形成に必要な動機付け
- ④ 実践とこれに伴う省察の習慣づけ

#### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・対人関係向上に向けたコミュニケーション能力、人権尊重にかかる意識や感覚、子どもの情報等についての守秘事項や学校安全上の配慮事項等協働実践を行うに必要な知識、技能、態度等は、教員としてだけでなく社会人として求められる。こうした教員として必須の資質、能力を実践で活用できるレベルに高める。
- ・①については、教育現場で求められるレベルを理解し、近づこうとする態度を育てるため、小学校等の教職員、保護者等を積極的に活用し、指導の充実を図る。課題として、協働実践に必要な事項を整理したテキスト等の充実があげられる。
- ・②については、スキルトレーニング、ロールプレイ等体験演習型手法の導入や、少人数でのグループ演習等による指導の充実努力、より高いレベルの技能、態度を身につけさせる。そのため、企業の研修や組織マネジメントを参考にした演習を積極的に活用する。
- ・①②に関わる実地の場として、近隣小学校での授業参観とその振り返りを実施する。授業参観の実施に当たっては、移動時間を含めた十分な時間確保が必要なことから、コース教員が担当する他の必修授業を連結させ、半日を授業に確保する。
- ・③については、入学後最初に受講するコース指定科目として、その後のライフコースを俯瞰した適切な動機付けがなされるよう配慮する。
- ・④については、学生相互の評価や振り返り等を重視し、個々の学習を充実させるとともに、学生が連帯して全体の資質、能力を上げていくよう「発見ノート」の活用に慣れさせるとともに、積極的な支援を行う。

#### 地域教育実践演習（3年前期・2単位）

##### [目標]

- ・学校・家庭・地域社会等地域が有する教育機能、役割や相互の関連性等について理解し、学校と家庭・地域社会との連携のあり方を具体的に学ぶ。
- ・地域人材、物的環境、自然環境等地域における教育資源についての把握や開発のあり方を理解し、小学校教育活動への具体的な活用能力を育成する。
- ・児童の学習を中心に据えた地域における様々な連携プログラムの指導、開発、運営や評価等を行うことを通して、指導者に求められる連携、課題解決、対人関係構築やプレゼンテーション等の資質能力を身につける。
- ・児童の体験的、探索的な学習活動を具体的に開発することを通して、児童の創意を生かし、意欲、課題解決力、企画力や実践力等を伸ばさせる指導のあり方について学ぶ。
- ・学習や活動の省察を通して、学校と家庭・地域社会との連携や「地域とともにある学校づくり」のあり方等を学ぶとともに、教員としての指導力の基礎を養う。

##### [主な内容]

- ① 地域における教育力の理解と、学校と家庭・地域社会の連携についての考察
- ② 地域と連携した教育活動、教育プログラムの指導、開発、運営や評価
- ③ 地域教育実践にかかる省察と、地域と連携した学校運営や指導のあり方についての研究

### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・ 小学校教育コースの教員を中心として、協働実践を行う小学校等の教職員、保護者や地域指導者等と連携し担当する。
- ・ ①については、学校・家庭・地域社会の教育機能、役割や関連性等についての学問的理解に加えて、外部指導者等を活用し、具体的事例をもとに実感的に理解されるよう配慮する。
- ・ ②については、小学校教員、社会教育主事、公民館主事や幅広い社会教育関係者等を指導者とした実践事例研究等をふまえ、小学校や地域を学習フィールドとした授業や活動の設計、教材等の開発、指導計画の立案や実際の指導等を行わせ、指導の充実を図る。

### 教職協働実践Ⅰ（1年後期・2単位）

#### [目標]

- ・ 学校や地域における協働実践の導入科目（キーワード：「現場に触れる」）として、コミュニケーション能力や調整能力、社会人として必要な基礎的能力等の必要性に気づくとともに、児童や教員等との触れあいを通して教育者として求められる資質・能力について自ら考える起点形成を行う。
- ・ 実践的活動に不可欠な省察のための資料を作成し、適切に整理ができるための、基礎的技能についても学ぶ。

#### [主な内容]

- ① 学校や地域における協働型実践の出発点となるものとして、「①外部と協働するための基礎的マナーおよびルールについて学ぶ段階」、「②学校や地域に出向き、実際に行われている活動を参観し、大まかに全体を把握する段階」、「③比較的取り組みが容易な場面、あるいは上級者の支援下においての実践的な活動の段階」に内容を大別する。
- ② 学校ならびに地域等の実情、受講者の興味・関心等、諸条件を考慮しながら、目的に合った活動を選択し、学生自らが活動に対して主体的に参加することを基本にするため、「時間割りに設定する授業時間に行う学習活動」と「時間割りに縛られない活動」とを組み合わせ実施する。

### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・ 地域の小学校や野外活動施設等との連携による学習や活動を含む。授業時間外の活動（必須）となるため、連絡先の登録および保険（学研賠、ボランティア保険）加入を履修要件とする。
- ・ 学びの環境づくりのためのPA（Project Adventure）系ゲームを体験することを通して、PA系ゲームの理念を理解し、基本的な実施方法を身につける。

### 教職協働実践Ⅲ（3年後期・2単位）

#### [目標]

- ・ 子どもの学びや成長を支える多様な個人や組織についての理解を深めるとともに、学校教員の立場でこれらを連携させ、互いに協働させるために必要な実践的能力および資質の向上を図る。

#### [主な内容]

- ① 子どもの学びを支える教員や保護者、さらには地域の役割と協働については、実践的に学ぶ機会が多い。本授業では、学校教育とは直接的なつながりを持たない人も含め、授業課題に関連する人々との交流を通して、学習者自身や子どもたちの成長に対する周囲との関わりについて学ぶ。
- ② 学習者の実践力を高め、学習者自らが周囲の人々と積極的に関わるために、学外での自己研修や協働実践を行う。

### [実践力向上のための取り組み・課題]

- ・ 具体的な活動として、社会の中でマイノリティーと見なされる人々を「生きた本」とみなし、自身のライフストーリーを語ってもらう「ヒューマンライブラリー」（坪井ほか、2011）を実施する。ライブラリー開催日に来場し、経験や思いを語ってもらう交渉を通して、学生らが自らの偏見やステレオタイプと向き合うこと、また交渉や開催にあたっての準備をする中で学校外の社会と接点を持ち、対等な関係としての交渉・関係を切り結んでいき、上記学習目標に迫っていくようにする。
- ・ ヒューマンライブラリー開催にあたっては、人権への配慮はもちろんのこと、「生きた本」として活動に参加してもらうための交通費など、費用面での課題が存在する。特に、都会に比べて社会の

多様性が少ない地方では、本として参加することが地域コミュニティにおける生活上のリスクとなる危険もはらんでおり、最大限の配慮が求められる。地域社会の成熟を待つだけでなく、教育活動としても課題解決に取り組む必要がある。

- ・学生は、児童や学校関係などと盛んに交流を持っているが、一方で、自分たちとはやや違った考え方、異質の生活や状況にある人々等との交流はほとんどない。多くの誤解や偏見は、相手に対する無関心や知識不足といったものから生じやすい。社会的マイノリティーとして一層誤解を受けやすい人々と関わり、生き方を知ることによって、誤解や偏見がいかに非生産的であり、かつ根拠のないものであるかに気づき、教師として中立・公平な視点を持てるようにしたい。

### 3. カリキュラム外の実践活動

以上では、小学校教育コースのコース指定科目について、主要なものをあげ、その概要ならびに学生が取り組む実践活動等について整理を行った。本コースの学習活動は、こうしたカリキュラムとは別に、コースが独自に行うコース行事があり、これらはカリキュラムと連動しながら学校・学級運営のノウハウや学習指導で必要な視点を養成するよう配慮されている。授業が明示的なカリキュラムであるとするなら、こうしたコース行事は暗示的なカリキュラムであるといえよう。暗示的なカリキュラムは、学校だけでなく、各市町レベルの教育委員会等との密接な連携で運営されており、これが所属する学生の自覚を高めるとともに、卒業後の教職生活に対する安心感を高める要因となっていることは否定できない。各学校や市町の教育委員会にとっても、本コースの学生が教育運営上の資源となっている面があり、相互に良好な連携が維持発展されることが望まれている。

本節では、小学校教育コースが実施している行事と期待される学生の学びについて整理する。

#### 3-1 チューター活動

小学校教育コースでは、多くの学生がちゃぶ台プログラムに参加しているが、これとは別にコース独自に実施するチューター活動を有している。現在、協働実践系に所属する3、4年生を中心に山口市内の小学校で学習支援を行っており、各学校で不可欠な教育スタッフとして認知されている。学生の目で捉えた学校課題は、重要な示唆を含むものがあり、貴重な教育資料として最終的に卒業研究に取りまとめられる。

現在、小学校教育コースとして学生を派遣する小学校は以下の4校で、週1~2回を目安に、半日から終日を学校での活動に充てている。

＜コースとしてチューター派遣する小学校＞

- ・山口市立白石小学校、山口市立湯田小学校、山口大学教育学部附属山口小学校、山口市立大歳小学校

#### 3-2 科学の祭典（サイエンスフェスティバル）

県内の市教委が主催する児童・生徒対象の科学イベントで、小学校教育コースでは、理科指導に対する苦手意識の克服と臨機応変なコミュニケーション能力の向上を目的として参加している。理科指導に優れた学校教員との交流やブース出展を通して理科教材作成の要点を知ることが、教職生活への不安を和らげ、自信を高める効果があるといえよう。参加の準備は、コース教員が担当する基礎セミナーや協働実践基礎を中心に実施する。理科指導のみならず、教材が持つ意味やその考え方、材料調達の仕方など、今後必要となる基礎的事項を実地に学ぶ絶好の機会となっている。以下では、小学校教育コースが主要なメンバーとして参加しているものについて、その概要を整理する。

○萩市科学の祭典：毎年9月の日曜日に萩市立明倫小学校で開催するもので、小学校教育コースの1年生が参加する。基礎セミナーに関連付けられており、児童理解やコミュニケーション能力を中心に、教員として必要な資質・能力を実践的に学ぶ機会として位置づけられる。前日の夜は、萩市教育長をはじめとする市内の教員との学習会がもたれるのが恒例で、教員としての心構えなどを学ぶ貴重な機会となっている。平成26年度からは、前日に長門市で同様の祭典が開催されることになり、2日連続しての参加となった。

○下関市サイエンスフェスティバル：毎年9月の土日（2日間）に実施する。小学校教育コースは、2年生が主体で参加するが、平成25年度より会場が商業施設（シーモール下関）となり、多様な来場者に対応する必要が生じたほか、同一フロアにある商店への配慮等、1年次に実施した経験を基に、より高度な運営能力が

求められることになった。1日目の終了後に、下関市教育委員会主催の学習会ならびに交流会が実施されることも、学生が教員としての自覚を高めることに役立っている。

### 3-3 クリスマス公演（クリスマス会）

クリスマス为主题に、ハンドベルや影絵、読み聞かせなどを組み合わせた総合演劇で、小学生や幼児を対象に、平成22年以降、毎年12月に実施している。各学年の役割が決められており、3年生は会場の確保を含む渉外（会場近隣の小学校や幼稚園への広報を含む）と全体総括、2年生は脚本の作成と演出を担当する。出演は1、2年生のみに限定され、衣装や小道具の調達・製作も、2年生をリーダーに1、2年生が行う。小学校で行う学習発表会等のイベントを意識した実践力の向上を図るものであるが、各学年の役割を明確にすることで、共同作業における責任やパート間のコミュニケーションの重要性、下級生を指導する難しさなどを実地に学習することができる。

平成26年度は、12月7日に周南市立富田東児童館、14日に山口市秋穂地域交流センターでクリスマス会を実施し、来場した児童や保護者から好評を得ることができた。学生の不注意を会場側管理者に指摘される場面もあったが、こうした失敗をバネに、一層良いものに仕上げようとする雰囲気や学生間に醸成されることで、学びの質が向上する様子も観察されている。評価や指摘を恐れるのではなく、成長の糧とするために、日頃の授業で互いの価値観を交流させ、相互評価の機会を適切に設けることが重要である。

## 4. カリキュラム編成上の課題と今後のあり方

小学校教育コースのカリキュラムとコース行事を中心とした学生の実践活動について整理したが、相互の関連が十分でなかったり、実際の運用にあたって内容が変化し、位置づけが不明確になってきたものがあることも否定できない。本節では、上述した以外の授業科目も含めてカリキュラム編成上の課題を整理し、今後の望ましいコースカリキュラムのあり方を考察する。

小学校教育コースのカリキュラムは、当初4つの系（教育実践系、子ども理解系、学習指導系、地域協働系）で検討が進み、最終的に現在の3系（子ども理解系、学習指導系、協働実践系）に整理され実施に移された経緯がある。教育実践系と地域協働系が協働実践系に統合された形であるが、一時的に「教職協働実践Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の3科目が共通教育科目に移される（平成25年度入学者以降は全てコース指定科目化）など、現在もやや混乱が残る。

また授業配置は、各系の授業を1年次から4年次までを通してバランス良く履修する構成となっているが、全体的な学習の関わりからみると工夫が必要な点もみられる。小学校教育コースでは、教員としての実践力が求められる性格上、いずれの系においても学校現場での観察や協働、学生が行うカリキュラム外のチューター活動を意識した授業が実施されており、こうした学習の効果を高めるためには、段階に応じて、学生が学校や地域で活動するためのスキルを身につけていることが望ましい。無用なトラブルや事故等を避けるためにも、初期教育の段階で協働実践系科目を充実させ、次第に子ども理解系や学習指導系科目を厚くしていく工夫も必要だろう。事前に協働実践系の授業で子どもや学校の実態に触れておくことは、子ども理解系ならびに学習指導系の授業にとっても良い効果をもたらすと考えられる。

さらに学部全体のカリキュラムでみると、コース指定科目と学部の課程認定科目との連携に課題がみられる。特に、教科の指導法については学部としても十分に統一が取れているとはいえない状況で、小学校教育コースについてみると、これが教育実習で学生が困難を抱える一因にもなっている。小学校教育コースでは、3年後期の基本実習が最初の主要なもの（中学校でのオプション実習を除く）になっており、このための準備として3年前期に「教材・指導法開発演習（コース指定科目）」を位置づけている。ここでは、指導案の意味とその作成の仕方、指導案に沿った模擬授業を指導しているが、各教科の指導法等で学習した内容が十分に反映できているとはいえない。学習指導要領や教科書を読み解く力にも不足がみられる。「教材・指導法開発演習」履修の前提要件として、教科の指導法に関する科目と連動しながら教材の作り方を学ぶ授業や学校での実践活動を学習指導の観点から評価し直す授業を開設することも検討が必要だろう。

## おわりに

小学校教育コースの発足以来7年が経過した。卒業時の教員就職者および正規採用者の多さは、デマンドサイドから示された評価といっても良く、要因としてコースカリキュラムを実践活動と結び付け、その意義や評価を繰り返し確認していることがあげられる。これは、教員養成教育におけるアクティブラーニングの効果であり、デマンドサイドからも一定以上の評価（岡村・霜川, 2014）が得られたといっていよう。

とはいえ、学生の実践活動やカリキュラムを振り返る中で少なからず課題も見出せる。全体を俯瞰し、不断に課題を改善していく姿勢が求められよう。特に、実践活動の評価に関しては、活動するフィールドや対象者との関わりにおいて、その質と量、適切性について課題が多く、経験の共有についても不十分さは否めない。資料を蓄積し、効果的なあり方を追求していくことが必要である。

なお、本研究は科学研究費（課題番号：23501149）の補助を受けて実施した。

## 参考文献

- 文部科学省（2014）：「大学教育部会（第11回）配布資料、大学教育部会の審議のまとめ（素案）」
- 山口大学教育学部（2007）：「大学・大学院における教員養成推進プログラム報告書「ちゃぶ台」方式による協働型教職研修計画最終報告書」
- 岡村（2012）ほか：「教員としての実践力を高める養成教育の試みー小学校教育コースの設計と4年間の歩みー」, 山口大学教育学部研究論叢 第62巻第3部, 73-80.
- 霜川（2009）ほか：「実践的学びを省察する「発見ノート」とその活用事例」, 山口大学教育学部研究論叢 第59巻第1部, 53-60.
- 坪井（2011）ほか：「共同研究 リビングライブラリーの可能性を探る」, 平成22年度社会学科坪井ゼミ（3年）共同研究報告書, 駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室
- 岡村・霜川（2014）：「教員養成の資質向上にどう取り組むか」, SYNAPSE（2014.4）, 28-31.